

次回企画展予告

第10回企画展 朝鮮陶磁シリーズ-7

李朝 鉄砂展

会期：昭和61年1月5日(日)～3月30日(日)

会場：当館第3展示室および企画展示室

■李朝鉄砂

鉄砂とは、白磁の素地に鉄分を含んだ顔料（絵具）で文様を施し、その上に透明釉をかけて焼成したもので、焼成後鉄砂は、器表面に文様が赤または黒味をもった鉄錆色に美しく発色する。

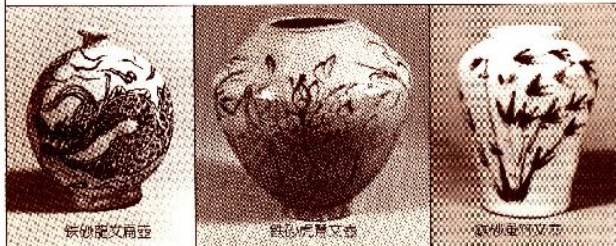
朝鮮半島での鉄絵具の使用は、高麗時代の青磁鉄絵（絵高麗）、李朝時代初期の粉青沙器白地鉄絵（鶏籠山）、白磁鉄象嵌などがあるが、鉄砂との繋がりにははっきりしない。李朝鉄砂の特徴は、白磁の肌に鉄絵具で装飾するところにある。

現在、鉄砂の始原は不明ながら、15～16世紀には既に生産されており、紀年銘の入った墓誌も出土している。しかし、本格的な生産は、17世紀になってからで京畿道広州郡や忠清北道槐山郡などの窯址から多くの陶片が発見されている。

鉄絵具をたっぷりと筆にふくませ、力強く、自由に大らかな鉄砂の絵付けは、他の技法に見られない魅力を作り出している。作品の大半は、鉄砂単独の装飾技法によるが、他の顔料（コバルトや銅）と併用して絵付けされたものも若干ある。この手の作品には、李朝を代表する優品が多い。また、高台を除く器表全面に鉄絵具を敷きつめた「総鉄砂」と呼ぶ珍しい手法もある。

「李朝鉄砂展」では、種々な器形、文様、技法の違った作品約60点を展示して鑑賞と研究に供する予定である。

(K)



鉄砂虎文扁壺

鉄砂虎文文壺

鉄砂虎文文壺

お知らせ

第3回講演を下記の如く開催致します。

日時：昭和61年3月1日(土)午後2時
(午後1時より受付を開始します)

場所：中之島中央公会堂(3階中集会室)
講師及び演題は未定です。決まり次第お知らせ致します。

※講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証はお忘れなく御持参下さい。

次々回企画展予告

第11回企画展 朝鮮陶磁シリーズ-8

「李朝 粉引展」

昭和61年4月22日(火)～6月22日(日) 当館企画展示室

談話室

★企画展を催すには1年前からの準備が必要になります。その中で最も重要なことは出展作品をお借りするという事です。今回の元の染付展のように開館3周年記念ともなりますと出展作品も多く、館長を旗頭にして学芸員は東奔西走、その範囲は国内にとどまりません。主任学芸員のK氏も過労ぎみでした。開催日まぢかになれば、ポスターの掲示依頼や各方面への資料送付など、館全体が慌しさを増します。そんな中、館長はほとんど休日の無いK氏を気遣って熱心に休養を勧めていましたが、「暇ができてから」のひとこともつり加えることをふれませんでした。

★毎年駆走も近くなると年賀状アイデア集の類が書店の店頭を賑わしますが、月刊太極増刊号「年賀状画歳図案集」(YF社)には当館所蔵の李朝鉄砂虎鷹文壺も登場しています。ピツリ眼の虎の姿は、展示室で御覧いただいた通り、猛々しい虎のイメージからは遠いものですが、勢いの方はさすが虎。受付横で販売している絵ハガキの中でもスター級の売れゆきです。そのまま年賀状用に100枚単位で買って行かれる方もあり、在庫ゼロという状況にもなりました。この虎、会員の皆様にはカレンダーの1月頁でもお目に掛かります。(Y)

編集後記

友の会の誕生したこの春から会報発行に至るまで、会員証の記入ミスや発送ミスなど、会員の皆様には此れられることも度々でした。会報も2号目となり、お取りをいただくことも少なくなったこの頃ですが、もっと皆様の御意見を伺えればと思っています。今後の友の会の活動に対する御希望、御提案等々、おたよりをお待ちしています。(Y)

1985年12月15日発行(年3回)/通巻2号

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.2

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

雑感

開館3周年を記念して開催した「元の染付 14世紀の景徳鎮窯」展、ご覧になって御感想はいかがでしたでしょうか。

元の染付は第二次世界大戦後によくその真価が再認識され、それと同時に世界のコレクターの間で一種のブームが巻き起りましたが、日本経済の高度成長期に当たって昭和40年代以降、日本がその先導役をつとめてきたようです。今回の展覧会の出品は全部で65点ありましたが、そのうち7割近くがすべて近年、欧米、東南アジアなどから将来されたものであることを聞かされると、改めて日本の経済力の強大さに思いを至されることでしょうか。事実、今回の展覧会はその日本の文化遺産の蓄積が、第二次世界大戦後いかに充実したのになつたかを、匡の内々に誘示するものでもありました。美術の秋を目指して来日した海外の方が、この展覧会のためにわざわざ大阪まで足を延ばして来館された例も多かったようです。中国陶磁に造詣の深いイギリス大使・ジファード卿御夫妻は、たまたま来日されていたスコットランド省大臣・ヤンガー閣下を御案内下さいました。そのほか、海外からの来賓で特記したいのは、景徳鎮陶器歴史博物館の劉新廣氏をお迎えしたことで、世界的な名品が一室に会していることに興奮の面もみえました。この得難い機会を捉えて研究集会を持ち、活発な意見交流を行うことが出来たのは幸いでした。

少なくとも中国陶磁に相当の知識と関心のある方々には、再び同じ規模・内容で開催は困難という好評を得た企画展でしたが、残念ながら一般の米館者数は期待したほどではなく、とくに友の会会員の御来館が、今会期を通じてわずか16/10名と聞いた時、私は暗然たる気分におそわれざるを得ませんでした。それは友の会会員のわずか3分の1、さらに期間中の入館者、約11,000人に対してわずか6%の数字を占めるに過ぎなかったからです。この問題は、来年度以降の友の会の課題として、私もよく考えてみたいと思っています。

今年もあとわずか、どうぞよい新年をお迎えになりますように――。

昭和60年12月

大阪市立東洋陶磁美術館

館長 伊藤 郁太郎

●特別講演会要旨●

「元の染付について」

日時：昭和60年11月5日(火)

会場：中之島中央公会堂

講師：京都市立芸術大学教授 佐藤雅彦氏

元の染付は、例えば定窯だと磁州窯だとかといった中国の他のやきものに比べますと、鑑賞の歴史が非常に遅く、正確に申しますと今から28年前に元の染付が分かるものであるかということが、日本で紹介されたものでございます。そして至って若い鑑賞や研究の歴史にもかかわらず、非常に高い評価を得ていて、これは美術史あるいは工芸史のなかでは非常に特異な存在だということがいえると思います。なぜそんなに遅くなって元の染付がクローズアップされてきたかと申しますと、現在世界では300点近くの元染付が知られているのですが、それらの殆んど全てが東南アジア、インド、中近東といった地域に分布していたもので、従って欧米はじめ日本・中国の学者達がこれらを見る機会が与えられたのは、ここ3、40年のことであつたために、知られる率が少なく、遅かつたということですね。

そのきっかけとなりましたのは、イギリスの有名な陶磁学者であつたホブソンさんという人が、1929年に初めて元の染付の1点を世に紹介したことからはじめます。イギリスのデビッド・ファウンダーション・オブ・チャイニーズ・アートという所に、サー・パーシバル・デビッドが集めた沢山の中国陶磁がありまして、その中に至正11年(1351)の年紀を書きつけた瓶があります。ホブソンさんがそれに気が付いて紹介したわけです。こうしてデビッド・ファウンダーションにある聖者の廟に収蔵されている染付類を調べてデビッド瓶と比較検討し、元の染付というもののがかなり優秀な作であるということを知らしめたということで、それに続いて1956年にはイスタンブールのトプカピ宮殿の美術館の元染付をも含めて総合的な見解を著作に発表されました。我々はポーブ氏の研究によって実際に中近東に赴いてそれらの作品を見聞することになったわけで、そこで元の染付というものが非常に格調の高い、しっかりとしたデザインの商品であることにびっくりしと思いを深めていったということになります。そして300点程の元染付が世界中の鑑賞家によって掘り起こされるということになったわけですが、そのほとんどが中近東・東南アジア・インドといった地域からもたらされたものという風にお考え願いたいと思います。

ところで、元の染付が作られた窯場は江西省の景德鎮でございます。景

徳鎮という窯は北宋の初期から青白磁というものを焼いております。その青白磁を田体にして、染付が元の時代が始まるわけですけど、そういうコバルトで絵を付ける染付が一体いつ頃から始まったのかということがひとつの問題となるわけです。

中国の馮先銘という学者は、香港の馮平山博物館にございます白磁で、青い色で文様ともつかない様なものが書かれている小さい三足の鏡という形の壺を取り上げて、中国の染付の始まりは唐の時代、8世紀にあるという風におっしゃるんですが、これは私達の見解では唐三彩系の白地に藍で点描をした藍彩と称するものであると見ておりまして、染付という名で呼ぶにはふさわしくなろうかと考えております。また、2、3年前に中国の雑誌に、北宋の時代に岩窟された浙江省の金沙寺というお寺の舍利塔の基壇から染付の破片が出てきて、これは宋の染付に違いないという風に書いてありまして、これを3年前程前に中国へ参りました時に浙江省博物館に頼んでみて頂きました。ところがその破片は確かにコバルトで絵は描いてあるんですけども、上にがっかけている釉が景德鎮の青白磁とは質が違つて、ボディの土も粗つぽいもので、とても景德鎮の染付の源流ということにはならないと認識しております。

こうして参りますと、染付の始まりを宋時代に求めることは無理で、やはり我われが認識しているように14世紀の前期に始まったと考えるのが妥当ではないかと思ひます。現在最も古い染付の遺品は延祐6年(1319)墓から出た瓶です。まだ充分に発達した状態ではなく、何かたどたどしい所が見えますが、ある部分の装飾の様式からいうと、後に盛んになる元染付の類と一貫した関連性が認められ、元の染付の一番早い例と考えていいと思ひます。

そしてここでひとつ考えておきたいのは、韓国全羅南道の新安沖で引きあげられた元の貿易船のことです。ここから至治3年(1323)という銘文のある木札が七枚出ております。積荷の内3000点程が景德鎮の青白磁で、鉄で絵を描いたものは何点か含まれているけれど、染付は1点もありません。ということは、この船が中国の港を離れる時には染付は作られ始めていたのかも知れないけれど、商品として海外に売り出す程のものには至っていないかたかと考えていいと思ひます。そう考えますと、染付の隆降たる発展というものは1330年位から後という風に考えられるわけです。

次に、なぜ染付というコバルトで絵を付けた青白磁が出てきたかという問題ですが、これはイスラム教世界との関係を重く考えないといけません。当時中国で貿易を盛んにしていた港に広州と泉州があります。これらの地域にはイラン系の商人達が数千人住んで貿易活動に従事していましたが、彼等は自分達の生活にフィットする出国の家具調度の中

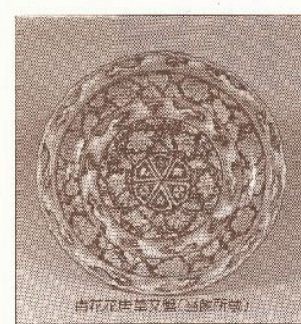


元白磁(左) 青白磁(右) (世界遺産登録品、(00000000)00000000)



延祐6年(1319) 文札(00000000)00000000

国に取り寄せるのと同時に、中国の優れた商品である陶磁器を盛んに彼の地に輸出をしていたということが文献にも出てまいります。このイスラム圏の商人達が一番よく使っていたのが金属製の大きな盤なんです。青銅あるいは黄銅(真鍮)製の盤ですが、僅かに丈夫ですが、色めの上では灰いもので、先端の良いものではないわけですね。そこで何かもう少し派手なものが欲しいと考えるのは当たり前でして、事実、ペルシャの有名な窯場ですらそういう風な陶製の盤を作つております。しかしこれは800度位で焼いたもので、軟らかく、壊れやすいものでして、何かもつと堅牢で色の美しいものをとて、景德鎮の硬いカオリンを何かで飾って盤に仕立てられないものだろうかと思ひました。そして不思議ではありません。事実、この時期からイスラム商人達は、回教圏で産出する「無名異」という良質のコバルト顔料を風元からかなり頻々と中国に輸入してあります。それを景德鎮に提供したと考えるといいと思ひます。元染付として知られているもののうち盤の数は60%を越えます。その盤の寸法は40cmから45cmという直径をもつてあります。そういう大きな器というのは元時代以前にはありません。中国人が大きな器を好むようになったという証拠はどこにもなく、やはりこれも外からの契機によって生まれたと考えるのが妥当ではないかと思ひます。そして、染付の盤は中東にはほとんど残つておらず、大部分は中近東・インド・東南アジアに流布してありましたが、全てが輸出用として作られていたと考えてもいいと思ひます。



青花磁器(盤) (00000000)00000000

ただ、今のところ元染付では盤という形以外に、イスラム圏に相型があると考えられる形式はほとんど見つかっていません。丸い壺だとが仙瓶は中国に伝統的にある形ですから、やがて染付が評判になるに従つて、そういう中国式の器を作るようになったということではないかと思ひます。そしてそういうイスラム風な器形というのは、明の時代に入りますともつと沢山の形が出てきますが、今回は元の染付の話ですから、明のものについては別の機会に譲ることに致します。

(文責：友の会事務局)

プロフィール

佐藤雅彦氏

1925年東京生れ。慶応義塾大学文学部芸術学科卒。大阪市立美術館学芸課長、京都市立芸術大学学長を経て、現在同学教授。中国陶磁研究の第一人者。

著書は「陶器講座・中国Ⅲ・Ⅳ」雄山閣、「中国陶磁史」平凡社、「やきもの入門」平凡社、「中国やきもの案内」平凡社など。

